

と原始人のような生活で再出発をした。

集団の最年長者として仲間の指導者となり、必死で開墾に励み、戦後開拓の福島村として成功した陰の力として賞賛されている。

元氣な姿を見て、忍従に充ちた百年の人生の歴史が顔に刻み込まれ、その生命力の強さに感嘆し祝福の辞を贈ったものである。

現在は家族に囲まれ、悠々自適、孫や曾孫に会うのが待遠しく、大相撲が大好きでひいきの関取りはいないが、一番も見逃したことがないほどで、開催する場所を待ちこがれている。

引揚者の中で百歳を越える人は数少なく、稀なので是非紹介したいと念じている。

(福島県 立花 開)

満州思えば

福島県 立花 アキ

私たちが渡満したのは昭和十九年四月二十五日、大槻町原畑の家をたった。近所の皆さんに見送られながら満州開拓に出発したのである。郡山駅より上野行き汽車に乗って私たちの仲間団長さん初め八人の団員は、家族を連れた汽車の旅である。アチラコチラを見学して神戸に着いたのは、明るる日の午後であった。

案内されたところは美しい旅館であった。私たち一同が室で体を休めていると、団長さんが来て船の都合で二、三日遅れるとの事を聞かされた。皆さんは伊勢参りに行く人もあれば、神戸の町を見物する人もいた。そして二日ほど過ぎた昼ころ出発の知らせがあった。皆さんは、旅館を後にして歩き出した。町の中をドンドン行くと海の近くに来た。

青々とした水の色、恐ろしい波の音、橋のところに

来るとうず巻になって、ぶち上げる波を見て驚くばかりである。そこを通りぬけて船乗り場に団長さんが案内人と話をしていた。今度は団長さんが先になって船に乗り一段一段とさん橋を渡る時の気持ちはもう日本と別れるかと思うとんだか胸が熱くなり、眼には涙さえ浮かんで来た。船に乗って甲板に上がって見ると、晴れた空の下には青々とした海が一面に見え、大波小波にゆられながら、三日の船の生活、四日目の夕方船の赤い電気に見送られて満州の大連に着いたのである。

大連の港を出るころはもうすっかり暗くなって次から次と満人の姿も見えてきた。団長さんが皆さんを連れてしばらく歩いていたら、宿に着いた。宿屋に着いて入って、早速食堂行ってご飯を食べるのですが、満州の米は日本と違って口に入れるとへんな味、又ポロポロ本当に日本のようではありません。ご飯を済ますとその夜はぐっすりと眠った。

明くる日になると又出発して大連の駅に行く。駅に着いて見ると大きな駅なのに腰掛ける所もなく、満人が地べたにまでゴロゴロと寝ている。ふとんを持って

いる人やパンを食べている人もいて、私たちは珍らしく眺めていた。

そのうちに新京奉天行きの汽車が来て、皆さんが我先と汽車に乗った。汽車はゴトンゴトンと走り出した。汽車に乗って窓より見ていると広々とした平野。どこを見てもポツリポツリある小さな家だけが通り過ぎて行く。窓に映る真っ赤な夕陽はすごく美しい。そのうち暗くなって汽車の中は静かになり、電気だけが明るかった。

汽車に何時間ぐらい乗ったのか、目がさめて見ると新京に着いた。早速宿に行つて休み、話によると新京に二日ほどいるとのこと。午後になって飯田さんが皆さんを新京の街の見物に連れて歩いた。そして今度の話によると佳木斯までは長い汽車に乗るとのこと。

昼ころ佳木斯行きの汽車に乗った。汽車の中にはたくさんの方が乗っていて前の方を見ると義勇隊の若い夫婦が、日本から来たばかりなのか、仲良く話合っている姿も見えた。広い道の両側にずらりと並んでいる並木道。ロバが車を引いて道を通るのや、テンピン

をかついで歩いて歩いている満人などが見えて満州の変わったのに驚いた。佳木斯に着いたのが五月八日であつた。

団長さん一同は佳木斯の駅前にある旅館に泊まり、私たちは別な所に行くとのことで父が先にドンドン行った所はなんだかお寺のような所で、そこで待つていたのは玉木さん一家であつた。しばらくぶりで会う親子兄弟は楽しく語り続けていた。そのうちに開兄ヒカキも来た。今度佳木斯に着いたら色々な用事があると云つてしばらくいることになり、暇な私たちは友達と佳木斯の街を歩いた。なんと驚いたことには、少し風が吹くと土煙が立ち、目の前が見えぬほどとてもひどかつた。それから広い街角には満人の女の人がカゴを下げてタマゴやたばこを売っている姿も見えた。こうして又佳木斯をたつのである。

今度は汽車ではなく松花江という河を船で行くそうだ。旅館を出て船乗り場へと急いだ。船乗り場に着いて見ると、たくさんの満人もいて話しかけるのだが、言葉がわからないのでただ笑うだけである。その内に

ボウボウと汽笛を鳴らして船が着いた。満人が我先にと船に乗り、私たちも団長の後より船に乗った。しばらく乗っていて、夕方になるころ依蘭の街が見えた。すると船乗り場に着いたのか、満人がガヤガヤ騒ぎながら下りて行く。私たちも船より降りて開拓会館に向かつた。会館に着くと、もう夕飯の支度が出来ていて早速ご飯を食べに行つた。「今夜は泊まり、明日団に着くそうです」そんな話を聞いて安心したのかグッスリと眠つた。

明くる朝になつたら先遣隊の団員が馬車を引いて迎えに来てくれた。そして子供や、荷物を馬車に乗せて八時ころ出発をしたのです。街から離れてドンドン行くとき大きな河にさし掛りこの河は牡丹江という河だそうだ。橋を渡つて行くと細い山道に入りそこからしばらく登つて行くと、そこに神様が居て皆さんが通る時に手を合わせて行く。そして山を下りると満人部落があつて日本人がゾロゾロ歩いているのでたくさんの満人が出て見ている。そして又しばらく行き、坂道を登ると開拓団が見えてきた。それで安心したのかホッ

とした。着いて見ると丸太を削った大きな門が立ててあって、先遣隊の人たちが迎えに出てくれた。団の中には小さいガラス窓の家がずらりと並んでいて私たちが家族が一軒の家に連れて行かれた。家の中に入って見ると、なんとヒヤリとした土の上。あれほど張り切ってきたのになんだか力がぬけてガッカリしてしまった。もっと良いところと思っていたのに。

私たちの入った開拓団は、満州国三江省依蘭県西阿郡山郷第十三次開拓団で千原団長初め、団員家族合わせて百人余りの新しい団であった。部落は二つに別れて先遣隊は一年ほど前に来て私たちは二度目の団員として渡満したのである。こうして海山越え、遠い満州開拓に来たのも、貧しく育った若い男女は、満州開拓と言えど名も良くあこがれの土地であったのだ。私もその一人である。夫は昭和十五年七月、応召され、私は家族と一緒に渡満したのである。

長い旅は夢のように過ぎて、なんだか思ったようなところではなく、毎日日本を思い出し、日本が恋しい病にかかったのか暇さえあるとだれもない学校の裏

に行っては日本に手紙書きを続けた。また団の井戸の水の悪いこと。生水は飲めないのだ。ブーンと生臭い匂い、それはそれは深く中をのぞけば目が回りそうだ。それに満州では水のもらないカゴを作り、それに綱を付けて持ち上げるのである。本当に日本で想像のできないことばかりです。また、夕方になると群を作って通る狼、それはそれは薄気味悪い。あの泣き声を聞いてだけで頭の毛が立つようだ。それからとところどころに人間の骨がある。ガイコツなど見ると本当に気持ちが悪くなる。そしてまた私たちが団に来たころは五月中ばを過ぎていのに北満はとても寒かった。なれない食べもののせいも、皆、赤痢病に掛り、死ぬようなめにあった。また夜になるとノミの大群にせめられ、なかなか眠られず、朝起きて見ると体が赤星だらけ本当にあのころはつらかった。

こうして色々のことがあって、渡満して早一年は過ぎていた。この北満の山の中に住んでいるとなんのニュースもわからずにいたが、ある日、団員の佐藤さんが街から帰って来て、なんでも今度戦争が始まるそ

うだ。街でそんなうわさをしていると語りみんなが聞いて驚いてしまった。そんな話があつて二、三日過ぎたころ、兄も召集され、家を発った。また夫も朝鮮にいる時は度々便りがあつたのにどこかに回されたのか便りがこなくなつた。

そして八月になつてからだ。開拓会館より通信があつて団長さんが、団員が兵隊に行くとのこと。十八歳から四十五歳まで皆兵隊に行くしらせなのだと言ひ驚いてしまったがこればかりはしかたありません。そして団員は皆たつて行つたのです。

後に残つたのは、年寄りや女子供ばかり、これからどうしたら良いのかまず先に、女に銃の撃ち方を教えることだと言つて飯田さんの指導で銃の撃ち方を始めた。最初は恐かつたが毎日練習しているうちに少しは慣れて雨の降る日は外で出来ないので事務所の中でやつていたら私が失敗して、事務所のガラス五枚も割つてしまい、悪いやら恥ずかしいやら皆さんに顔むけが出きなかつた。

そして八月八日の日であつた。また会館より便りが

来て、「ソ連軍が満州に入つて来た。早く団を出るよりに」と知らせがあつたのに団長さんは団を出なかつた。毎日毎日寂しい日々を暮らしていたが、団にいたところでどうにもならず、皆さんと相談をして団を出ることにしたのです。大切なものばかりリュックサックに入れ、隣の松江さんの家に行つて見ると三人の小さい子供を前にして悲しそうな姿を見て、本当にどうしたらよいものか、今夜は眠るどころではありません。明るくなるのを待っていた。

忘れもしない今日は八月十六日、どこの家からも朝早くランプの灯がともつて、団を出る準備をしている。毎日降り続いた雨もやみ、今日はカラリと晴れ、満人のヤーンさんに馬車引きを頼み、子供や荷物を馬車に乗せて団を出たのです。雨あがりなもので道はぬかるみ、坂道のところに来ると、馬車は動かなくなり、あと押しをしたりしてようやく大きな道に着くとヤーンさんの馬車は逃げてしまつた。そして牡丹江の河岸にきた時団長さんが皆さんを集めてどこに行つても苦しむばかりだ。いっその事この河でと話してい

るところに神の救いか兵隊さんが通りかかり、兵隊さんの話すには早く船乗り場に行つて、船でハルビンに行きなさいと教えてくれた。団長さんは皆さんを連れ、船乗り場に急ぐのであった。

私たちはゾロゾロと依蘭の街に入ろうとした時です。ソ連の飛行機が飛んで来たのです。すると団長さんが「伏せろ、伏せろ」と大声を出して呼ぶより早いかも、のすごい音を立てて爆弾が落ちたのだ。私たちは堀に伏せたり畑に伏せたりした。しばらくして頭を上げて見るとすぐ近くに落下していました。あの時は驚いてしまいました。丁度昼ごろで太陽の光は、伏せている私たちの体を焼きつくような熱さであった。なんだか人の泣く声があるとと思ったら、満人の年寄りが頭から血を流して「アイーヨー、アイーヨー」と通り過ぎた。また兵隊さんの引いて通る馬も足を撃たれたのか真白い包帯の上から真っ赤に血がにじみ出ている。走り回る兵隊さんもおれば、荷物を背負って逃げる満州人もたくさんいたのです。

私たち一同は船乗り場に急いで行つて見ると、満人

がもう船はない。危ないから船は通らないと言う。満人の目はとても恐く見えた。私たちは引き返すほかはなく会館にもどった。会館に来て見ると、たくさんの人がいて団長さんはだれに聞いたのか皆さんの前に来て話してくれた。それは日本が敗戦だと。聞いた皆さんの驚きと言ったらありません。日本が負けてはどうなるか。日本に帰ることが出来るだろうか、語り合った。そして夕方になるとどこから来たのか兵隊のトラックが何台も通りどこへ行くのか、ブーブー音を立てて通り過ぎた。今夜は外で一夜を明かし明るくなる日になって依蘭の街をたつことになった。

全員が会館を後にして出発したのである。しばらく歩いて門のところに来ると満人の警察が銃を持って見張りをしていた。団長さんがその時皆さんを急がせて、その場を一生懸命に通り過ぎた。今度出たところは松花江の河岸で、見るとたくさんの船が浮かんでいて、だれ一人歩いている姿は見えません。時には爆発の音がしたりして、なんだか戦場の中を逃げ回っているようだ。河岸をどんどん行くと日本人が五、六人い

て、その人に「向こうの山には匪賊がいるから危ない、皆殺しにされるから行かない方が良い」と言われ私たちは、土手に腰を掛けていたら、団長さんが皆の前に来て話しかけた。「心配はないよ。力を合わせて頑張ってみよう」と励ましてくれる団長さんを見て悲しく涙が出た。日本の国ならば心配はないが、何しろ外国では言葉が通じないし、頼るのは団長さんより他ないので。

そこでしばらくいると満人の船が来て皆さんを乗せて河を越してくれた。そして船より下りて山にはい登り、山を越して向こう側に出るしかない、一生懸命に山の上上りて行く。山の上に着いたころはもう太陽も西山の影になり空は茜雲が輝いていた。山を下りて大きな道に出たが今度恐いのは満人である。女子供ばかり歩いているのを見て、どんなことをされるかわからず、団長さんが部落の近くに来ると、子供を泣かすな。早く行くんだと急がせて歩くのであった。若い女たちは銃を背負い年寄りの手を引き、また母親は、子供を背負い、子供の手を引き荷物をかかえ、歩くこ

の姿は悲惨であった。ハルビンハルビンとは言うもののどこに行くのかあてがなく歩き続ける避難民。

こうして黙々と無我夢中で歩いていたら前の方に一つの黒い影、驚いて立ち止まり団長さんが近くに行くと見ると、兵隊さんが休んでいたのです。あの黒い影を見た時に胸がドキンとした。何者かに出会ったら命がないのですから。又歩くわ歩くわ。夜通し歩いて今度出たところは一面草野原だ。夜も寝ずに歩いてるせいか体が重く銃の重さや五十発の玉の重さが体にしばらく今にも倒れそうだ。こうして雨の日も風の日も歩き続けているので体の弱い人や、足の悪い人にはとても無理である。少し休むとまた出発の声がして歩き始めると足の悪い緑川さんの奥さんが泣いて歩かないのです。皆さんに言われてもただ泣くばかりだ。どうすることも出来ません。かわいそうだが緑川さんを後にしてまた歩き出す。満州の山は木がなく人の背丈ほどもある草だけの山なのである。

そこをしばらく歩くと、満人部落があり、部落の近くに来た時に、後の方で銃声が聞こえたので、振り向

くと満人が五、六人大きな棒を持って追いかける姿が見えたのである。逃げ回る日本人を叩き殺し、着ているものや、荷物を取るのです。色々の恐い目にあったりしながら毎日毎日歩いている。今日も草の中、道がない。一面の草原、行けど進めど果てしなく、見渡す限り草がのびて少し離れると前に人が見えなくなるのです。

こんなところを夢中で歩いていたら又銃声が聞こえ、なんだろうと思ったら、嶋さんの母ちゃんの話すには「団長さんがバーちゃんを撃つたのだ」と聞いて驚いた。無理もない、七十歳を越した年寄りにはこう毎日歩くとなると大変なもの。今日も草の中を一日中歩いて、もう夕陽が沈もうとするころ後を振りむけば黙々と歩く皆さんの姿、今にも倒れそうだ。

若い奥さんは、大きなおなかをかかえ荷物を背負って歩いている。又母の背中が飢えて泣く子供もあれば、四、五歳の子供が泣き泣きはだしのまま母を追いかけて来るのもある。本当に負けた国の悔しさ。逃げ回る避難民は地獄です。

ここまできたらもう暗くなったので歩くのは大変だ。今夜はここで皆さんが草の上に休むことにした。私も歩き疲れていつの間にか眠ってしまった。何時頃か雷の音に目がさめた。見る見る内に空は真っ暗、雨がぼつぼつ降って来たかと思ったら、うなりをあげて降って来た。稲妻ビカビカ雨は水を流すように土砂降りとなって体中がビショビショと濡れてしまい、だれ一人話し声はなく、ただ雷だけがゴロンゴロンと鳴り響いていた。

しばらくすると、雷は遠ざかり稲妻だけが時々光っていた。その夜は過ぎ、明るくなると又歩きだした。今度出た道はデコボコとした石ころの道でとても歩きにくく、雨が降って道はぬかるみこの足どりではとても大変である。段々進んで行くと馬が死んでいて、臭い匂いが鼻に付きどこまで行っても匂うのである。またドンドン先に行くと小さい子供が毛布に包まれて置きざりにされている。母は死んだのかそれとも捨てて行ったのか、悲しいことばかりが目には止まるのです。

今日もまた雨降り。もう地下足袋はボロボロ、濡れ

た体は今にも倒れそうだ。山から道、道から山へとあてなく歩くこの姿。飢えているので山に入るとブドウの葉や木のみを取って食べたり、満人の畑に入っては唐黍やジャガイモなどをとってきては生のまま食べたりました。こんなところを満人に見つかったら大変です。私たちは、今日あつて明日のないこの命だ。

夜昼歩き続けて通りかかったところは、大きな河です。あまり大きな河なので驚いてしまった。どうして渡ろうかと考えていると、たくさんの兵隊さんや開拓団の人たちが来てどうして渡ったら良いかと相談をしたら。明るくなるのを待って河を渡るのである。男の人や兵隊さんは年寄りや女子供をおぶったり手を引いたりして、河を渡るのである。私たちが恥や外聞もなく着ているものや荷物を頭に乗せて丸裸で渡った。河の水は首の所まであつて皆さんと手をつないで渡らないと流されてしまいます。

河岸に上つて着物をきている時に突然銃声が鳴り、驚いて振りむいて見ると、渡辺さんが足の悪い男の子を撃つたのです。かわいそうに一人前になったのに足

が悪いため殺すなんて。そしてドンドン歩いて行くと街に出た。するとソ連兵がいて、団長さんのそばに来たかと思つたらポケットに手を入れたり、腕をさすつたりして金はないか、時計はないかと言つて日本人の品物を取り上げるのです。

この街は方正と言つるところだと団長さんが語り、少し高い丘の上には赤いレンガの家が並んでいて、ソ連兵がたくさんいるのが見えた。ソ連兵が手まねをして呼んでいるので団長さんが行つて見ると砂糖をくれると言ふ。私たちは並んで待つていたら少しだけど手の平のせてくれた。砂糖を見ると泣くほどうれしかった。また団長さんの後よりゾロゾロといつて行くと、大きな満人部落に案内された。今夜はこの部落で泊まるのである。皆さんが庭で休んでいるとソ連兵がドヤドヤと入つて来て、あちこちを見ていたが若い女を連れて行くのです。驚いて男の人の後に隠れているのに捜し出して連れられて行く人もあつた。その夜はドキドキしながら一夜を明かした。

明くる朝になつて団長さんが皆さんを集めて「今度

は方正收容所に入るんだ」と言つて、收容所の向かいの大きな道をどんどん行くと、大きな部落があつた。その前に方正伊漢通收容所と書いた看板が掛けてあつた。そこに入つて行くと一つの開拓団は一軒の家に住むことになり、收容所生活が始まつた。豆やコウリヤンが配給になり、拾つて来た缶詰の空き缶で煮炊きをして食べるのです。收容所に来てからはソ連軍の仕事に連れて行かれ、松花江の河岸の船乗り場で船に米を積んだ。帰りには空になつたカマスやアワをもらい大助かりであつた。

九月に入ると朝晩めつきり寒くなり、夏の着物ではとても寒い。また歩きの疲れや食べもののせいか年寄りや子供は毎日のように死んで行く。私の団でも子供はほとんど亡くなりそして嶋さん夫婦や若い校長先生の奥様までが亡くなつた。かわいそうに校長先生の三人の女の子は冷たくなつた母のそばで泣いているのです。その内に満人が来て三人の子供を連れていつた。そしてまたこのころこの部落に毎晩のように匪賊が出て銃声が鳴つたと思つたと弾が頭の上を飛んでくるので、

地べたに伏せているのです。寒くはなるし配給のコーリヤンは少しばかりで食べるのにとでもたりない。畑に行つてはナヅナやハコベを取つて来てコーリヤンに入れて煮るのですが、コーリヤンは皮があつてなかなか煮えないので困りました。又こゝろ寒くなると住んでいる家は戸もなければ火の気もない。こんな風では皆死んでしまいます。団長さんが皆さんと相談をして掘つ立て小屋を建てることにした。私たちは野山に行き草を刈つて来ては、屋根や下敷は草で囲み、もらつて来たカマスをふとんのかわりとし、こうして寝ると前よりはよっぽど暖かかつた。夜になると頭を並べて草の中にもぐり日本を思い出して語り合ひのです。

そしてまた恐ろしいことがおきたのです。ソ連兵が来て女に乱暴するのです。娘さんは皆頭を坊主刈りにして男の姿でいるのですが、そのような姿をしていても見つかつて、父母の前で乱暴され、父母が止めると父母はその場で殺され、その女の人も連れて行かれ、殺されたそうです。私たちはそんな話を聞いて部落におられず、山の中に隠れていたのです。また、この方

正は平らな所で、松花江より吹き上げる北風は粉雪を吹き飛ばすように部落の回りを吹いている。このような寒さで死人は増えるばかりです。部落の壁の近くには死んだ人が山と重なり、月夜の晩に外に行くと薄気味悪いほです。

寒くはなるし、食べるものもないので、若い女の人満人のところに行くようになった。

こんな生活をして食べもののせいとか、何人も眠るようにこの世を去った。私たちは毎日柴取りに行っていたのです。ある夕方のことでした。私が柴取りから帰って来るとなんだか頭が痛いやら、体は寒気がするやら、夕飯も食べず寝てしまった。明るる朝起きようとする足が思うようにならず、また耳は聞こえぬ。そのままカマスをかぶって寝てしまった。一人で考えて見ると、私も悪魔の病気にとりつかれたのか、この病気にかかった人で治った人はいないんだと思うと悲しくなると、とめどもなく涙が出て、掛けたカマスのごみが顔につき、なんと悲しいことではないでしょうか。迎さんが来て、「秋ちゃん早く良くなって一緒に

日本に帰るんだぞい」そんなことを言われると、なお悲しくなって泣けて来ます。このような日が何日か続き、私の病気は友の優しい心で治ったのです。

しかし年寄りや体の弱い人は寝たままでの掘った小屋の中では次から次と亡くなって行く。友達の子ちゃんも、お産のこじれから亡くなった。飯田さん夫婦、玉木さんの時子さん、佐々木さんの母ちゃん、そしてまた若い女の人は命を助けてもらおうと満人のところへと行くし、家の中はガランとしてとても寂しくなった。外はビュービューと木枯らしが吹いて、小屋の中は吐く息も凍り泣いた涙も氷となり、小屋の入り口にはカマスを一枚ぶらさげておくだけで、コモにあたる北風は、身も縮まる思いだ。あの丈夫な団長さんの娘ミツ子ちゃんも病気にはかなわず、十九歳の若さでこの方正の土となった。

私たちが方正収容所に入ったころは何千人もいたのに、今は数えるくらいです。金のある人や丈夫な人は、皆ハルビンに立って行き、この部落に残った人はほんのわずかになってしまった。ようやく春も間近になっ

たのに、今度は团长さんが倒れてしまったのです。疲
れやいろいろの心配をしていたから、团长さんも大変
でした。団の人を助けまた收容所の部落長としていま
でやっていたのです。

世話をしてくれる人がいないので困っていると、北
海道開拓団の人で朝倉さんと言う人が世話をしてくれ
るのだと言って、私たちの家に移って来た。この方正
の所で長い冬を過ごし、ようやく暖かくなったのに、
病人は次から次と増えて毎日のように亡くなっている。
そばで迎さんも病気になる、うわ言ばかり言い、母も
亡くなりヒロちゃん親子も亡くなった。迎さんの美子
さん、次から次と亡くなって行く人を私と妹キノチャ
んが、壁の近くに置いて来るのです。高い壁の回りは、
亡くなった人で、山と重なり本当に哀れなものです。
それから何日かたった時、朝倉さんから方正の避難
民は皆出発すると聞いて皆さんは大喜びです。歩けな
い人は八路軍の馬車で送ってくれるそうだ。早速たつ
ことになり、病気の私や、迎さん、矢野さんは馬車で
行きますが、小さい二人の妹や、飯田さんの姉妹は歩

いて行くのです。歩ける人は馬車に乗せてくれないの
です。かわいそうだけど小さい足どりで先にこの部落
をたちました。私たちは少し遅れて行ったが、妹たち
には会わなかった。一日中馬車に乗って、着いたとこ
ろは小さな宿屋で、来る人を待っていたのだがなかなか
かこなく、暗くなって足元が見えなくなったところ親を
亡くした小さい妹は、姉の手にぶらさがるようにつか
まり泣き泣きたどり着いたのです。

その夜はこの宿に泊まり、明くる朝になって見ると
妹二人と飯田さんの姉妹がいなのです。朝倉さんに
聞くと夕べ満人に連れて行かれたと言った。皆離れ離
れになってしまったが、また馬車に乗って走りだす。
どこに連れられて行くのともしらず、昼夜二日ほど走
り、着いたところは旧珠河県今の尚志県であった。馬
車より降りて連れて行かれたところは、馬宿屋（馬車
引きたちの泊まる所）です。家の中に入って見るとた
くさんの日本人がゴロゴロと地べたにまで寝ていた。
私たちもみなさんの仲間に入り休んでいるとこの人た
ちの話すには、今度ハルビンに行くのには汽車で行く

とのこと。丈夫な人は満人のところに行つて働き、お金をもらいハルビンに行くそうだ。そのような話を聞いて私たちはこんな体で働くことは出来まい。又満人は使つてはくれないだろう。私たちの開拓団の人でここまでたどり着いた人はわずか七人だけです。

皆さんと相談して、自分で自分のことを考えるほかはないと別れたのです。矢野さんは嶋さんの姉弟を連れて出て行き、私も日本人の案内で働いて食べさせてもらうことにした。でも満人の家に行つても大変です。

第一に言葉がわからないし、何の仕事をするのにも、反対なことばかり、日本とすることが違うのです。間違つたりすると、わからぬことを言つて怒られ、また子供には馬鹿にされ、悔しいけれど出て行けば行くところが無いし、一人でだれもいないところに行つては泣くことなど度々であった。こんな日が毎日続いているが、どうにもなりません。辛いこと。悲しいこと。悔しいこと。それはそれは山ほどあった。そんなことは書くまい。語るまい。自分の胸におくことにします。

こうして満人との生活も何十年の月日が立つて、夢のように過ぎしてしまいました。

思い出すは祖国日本である。近くに住んでいた皆さんと相談して日本の兄弟に手続を頼み、いろいろとお世話になつて懐かしい日本に帰ることが出来ました。

また日本に帰つても役員の皆々様や皆様にお世話になりました。今はとても幸せに過ごしております。

ありがとうございます。

【執筆者の横顔】

アキは私のいとこで、生来相互に密接な関係にある。私は農家の長男なのに、満蒙開拓に出たのが村でも最初で、私に後続して二十家族百余人が北滿へ渡つたのは明らかで、半数近くが死亡し、生還した人々も大変な苦難に会い、アキもその中の一人として、私のため犠牲になったと気の毒に思い、不びんでならない。

アキは岩瀬郡の山合いの農家に生まれ、健康で素朴に育つたが、長兄は海軍を志願して兵曹になったが、後に満州開拓に行き、次兄は叔母の養子となりブラジ

ルに移住したりで、アキは私の弟の友と結婚したが、夫は間もなく召集になり、朝鮮からフィリピンに転進して戦死した。私の父も郡山分郷開拓団の団長に信任されて一家を挙げて渡満し、アキも同行し、三省省依蘭県に住んだが、間もなく戦争は終わり、ソ連軍の侵攻で汽車も船便も失い、男は戦場に向かった後の老幼婦女だけの避難行は、道なき山野に迷い、目指すハルビンに達し得ず、団長以下多くの傷病死を出して方正街に冬を越して、幾千の難民と共に飢餓と寒さの惨害により皆離散して残留者として憂愁の長年月を過し、老境に入って辛うじて帰国し、私の次弟の護を頼って住み、護没後は寂しく一人暮らす老後となったが、過去の辛酸風雪を思えば、せめても今は平安気楽ですと、静かに語る。このころは、同じ運命に泣いた帰国者仲間と慰問し合うのを生甲斐の如くに行っている。

あたらしい女の生涯を棒に振った不幸を、だれを恨むでもなく堪え忍ぶ生態をあえて強いても評する他に言葉もない。

既に古希を過ぎ、せめて、更に長寿をと祈るのみで

あります。

郡山郷の人々は大半がこのような運命をたどったと聞いています。

(福島県 立花 開)

海外居住の動機

及び海外での生活概況

茨城県 生井 房治

ある人より満州中央銀行の入社試験を受けて見ないかと言われ早速受験したところ合格の通知が届きましたので、郷里の親にも相談し多少の反対があつたが許可を得て、昭和十年三月二十五日東京駅午前十時出発しました。東京駅では茨城県人会及び学校級の連中五、六十人が見送りのため集まっていました。私一人で発つたのではなく星野直樹さんの奥さん及び女中さん、石渡莊太郎さんの弟慎吾さんの四人でした。私の父は星野の奥さんに何かといろいろお頼みしている様